

虚子記念文学館投句特選句・令和六年八月

稲畑廣太郎 選

風化せぬ記憶の影よ走馬灯

大阪 石橋玲子

蝸の最期の声を拾ふ苑

兵庫 玉手のり子

夕焼に二人の瞳滯れてをり

石川 辰巳葉流

明方のかなかなの声細く満つ

兵庫 西尾登志子

まだ誰も来ぬ虚子館の冷房に

新潟 安原 葉

女学生恋の話とソーダ水

石川 白根寿子

過去未来おもはぬ今や月涼し

神奈川 進藤剛至

ひとりづつ消ゆ鈍行の帰省かな

東京 桜鯛みわ

あぢさゐやあをたんたんたとたへをり

三重 水越晴子

まつさらな進路調査書雲の峰

兵庫 武田奈々

(青少年)

入選句・令和六年八月

女子会の妻インスタに松茸飯	埼玉	小田毬藻	撫そよぐ青き秋空ちりばめて	兵庫	槌橋眞美
まぼろしのふうけいとしてみなつまつり	千葉	煙陽	甘くともさらに塩かけ西瓜かな	大阪	西尾浩子
送信を押すか押さぬか赤蜻蛉	福井	白井ポピー	母の手を取りて六斎念仏に	兵庫	中村恵美
底紅や眩き白のワンピース	兵庫	足立朱麻	キャンパスのバス停三つカンナの黄	兵庫	辻 桂湖
大夕焼仏の住まふ西の方	奈良	堀ノ内和夫	先づ芙蓉ほめて回覧板渡す	大阪	鈴木輝子
期待せぬ方が涼しく勝ちにけり	京都	山崎貴子	今はもう空に傷なし原爆忌	京都	西村やすし
落雷に覚め遠雷に眠りけり	大阪	多田羅紀子	遠花火果て番犬の寝息かな	静岡	いたまき苙
星涼し暈二重なる月もまた	岡山	石井宏幸	夫を待つガレのランプや秋涼し	大阪	棕本望生
汀子邸星の階銀河濃し	香川	三宅久美子	海亀のごとく島より船出づる	熊本	貴田雄介
あえかとは残暑にまぎれゐる風も	鳥取	棕 誠一朗	夕まじや醬のにはふ島の宿	大阪	押見げげげ
息を足し一步踏み出す日の盛り	香川	真鍋孝子	十分に生きてだらうか秋の蟬	兵庫	日下富貴子
銀河濃きこと三瓶野の闇もまた	鳥取	前田 千	追憶のだうだうめぐり走馬灯	大阪	田邊育子
蟬鳴きて命を繋ぐ館の庭	兵庫	辻田あづき	野に咲きし秋草句座を淋しめず	兵庫	柄川武子
大花火めざす人出の駅となる	兵庫	山村千恵子	嘆くこと又一つ増え秋暑し	兵庫	道中義臣
混み合へる最終バスや銀河濃し	徳島	多田まさ子	蝸の鳴きてそろそろ夕支度	兵庫	入谷千恵子
日を弾き俳磚包む蟬時雨	鳥取	棕 則子	今日からは盆の僧なるはらからよ	兵庫	山崎渺美
豪雨止み猛暑一気や地球病む	大阪	林 曜子	甲子園残暑の熱気とび交ひて	兵庫	河合美恵子
老松てふ今宵の冷酒買ふ伊丹	兵庫	高橋純子	七夕や親子の短冊寄り添ひて	兵庫	高市敦之
パリ五輪寝不足がちの今朝の秋	兵庫	深尾真理子	朝顔や宿題急かす母の声	兵庫	岩水ひとみ
汗涼し雨のセーヌの開会式	兵庫	岸川佐江	一撃は先の反つたる蠅叩	滋賀	近江堇花
小粒とも言ひ得て小玉西瓜かな	京都	木村直子	はらからの逝きたる故郷鰯雲	愛知	小野 薫
この暑さ病める地球の呻きとも	兵庫	池田雅かず	俳磚に色づく光夏惜む	兵庫	奥田好子
華やかに光清けき花火かな	兵庫	河野ひろみ	仕留めしは妻が一撃蠅叩	愛知	海神瑠珂
拝殿に奉る神鼓の露涼し	石川	赤島磨智子	ねこじやらし取って髪の毛切りに行く	滋賀	太田怒忘
遠き地の輝くメダル灯涼し	兵庫	永沢達明	六斎の踊り守り継ぐ京暮らし	京都	杉森大介
			空近しチシマギキョウに白き風	兵庫	福田光博

身も口もまこと達者に生身魂	石川	辰巳昌彦
立ち枯れの樹々の囁き霧の池	神奈川	小林 心
イザナミの黙や線香花火老ゆ	兵庫	風待ラテ
陵へ二丁の碑曼珠沙華	奈良	豚々舎休庵
激震地つくつく法師なきつくす	兵庫	伊集院秀樹
銀漢を零れて星の降る岬	和歌山	中島紀生
終戦の日や永らへて兄妹	石川	伊東弥太郎
夏空や句友訪ねる始発バス	愛媛	星月彩也華
子供らの声遠ざかる晩夏かな	神奈川	平野孤舟
Tシャツのはりつくほどに蟬時雨	神奈川	斉藤苑子
労ひの言葉でたたむ秋扇	兵庫	恵島祥一朗
赤とんぼ残像熱き甲子園	兵庫	阿曾宏之
廬山寺へ車降りれば法師蟬	兵庫	キートスばんじょうし
廬山寺や式部の庭に涼新た	兵庫	太平楽太郎
過ぎし日のみんな美し走馬灯	大阪	若林友子
特攻の翼つつまむ晩夏光	神奈川	金子三奈乃